



開会あいさつをする  
梅津会長

# 言葉で縛らないケアを

## 北海道抑制 廃止研究会 認知症理解深めて

北海道抑制廃止研究会(会長＝梅津光香・定山溪病院看護部長)がオンラインで開かれた。「こじばが支える

尊厳」認知症を理解し、スピーチロックのない関わりへ」をテーマに、身体拘束廃止に

向け、身体と同様に言葉でも患者・利用者を縛らないケアの重要性を再確認した。

札幌市南区・定山溪病院の田屋香認知症看護認定看護師は「認知症のある方と関わるう

と」を講演した。▼認知症患者の行動・心理症状(BPSD)は、生活上に生じた困難に対する対処行動やストレス反応であり、表面的な行動だけを見ると不可解であっても、その行動には必ず理由があること▼認知症になっても最後まで感情や自尊心は残ること→を強調。表面的な行動を抑えつけるのではなく、行動の理由、本人の困りごとに着目したケアとともに、「あな

たは大切な存在」と伝える言葉かけや関わりの大切さを説いた。  
伊達市・交雄会だて病院の藤井菊乃外来師長と、併設の介護医療院うみかぜの藤浦弥生看護師長は「抑制廃止に向けたただて病院の取り組み」を紹介。認知機能の低下した入院患者が多く、ナースコールが頻繁に鳴り、転倒転落リスクが高いなど、スピーチロック(言葉による抑制)につながる言動が起きやすい環境にあるという。

2021年度から3年計画でスピーチロックに関する研修を行い、▼どんな言葉がスピーチロックに相当するのか▼どう言い換えるか▼どのカーなどを職員全体で振り返り、理解を深めている。

22年に設置された看護部倫理委員会は、身体拘束に関する研修を実施。ベッド体幹抑制、車いす安全ベルト、ミトン型手袋の体験など患者の立場を体感し、全職員で身体的拘束最小化への意識を共有。いずれの研修でも研修前後アンケートでは「業務中にスピーチロックを意識したい」「身体拘束を行わないケアを目指したい」など職員の意欲向上、前向きな意識変化が見られたと報告した。